

(1. 解答例)

南九州のカルデラとその中にある活火山は、北から加久藤カルデラと霧島、始良カルデラと桜島、阿多カルデラと開聞岳、鬼界カルデラと薩摩硫黄島がある。加久藤カルデラは加久藤盆地に位置し、陸域にあるが、始良カルデラは鹿児島湾の湾奥部、阿多カルデラは湾口部に位置する。鬼界カルデラは海面下に存在し、そのカルデラの縁にあたる薩摩硫黄島、竹島が海面から顔を出している。始良カルデラの北東部には水深200メートルをこえる若尊カルデラがあり、現在も海底から熱水や火山性ガスが噴出している。(活火山に若尊、池田・山川を加えてもよい) (234字)

(2. 解答例)

薩摩藩は九州制覇の過程でふくれあがった膨大な家臣団を維持するため、領内約110の外城(郷)という行政区ごとに半農半士の郷士を屯田居住させた。外城は武士集落の麓、農民集落の在、漁村の浦(浜)、商人集落の野町に分けられていた。在には数戸で編成する門と呼ばれる生産共同体があり、年貢は門ごとに賦課された。門ごとに耕地を割り替えることが行われたので、これを門割制度と呼んでいる。(185字)

(3. 解答例)

鹿児島近海では春から初夏にかけて黒潮に乗り北上する回遊魚である。遠洋一本釣りで鮮度を保つために急速冷凍されたいわゆるB1カツオは、刺身、たたき、カルパッチョなどに調理される鮮魚として流通する。水揚げ港の枕崎では頭を丸ごと煮たり焼いたりする豪快な「びんた料理」が名物だ。大半はかつお節の原料として利用され、枕崎と山川が国内を代表する二大産地としての地歩を築いている。副産物である腹皮、せんじの味わいも捨てがたい。(205字)

(4. 解答例)

昭和55年に旧通産省が提唱したテクノポリス構想は、半導体やICなどの先端産業、工科系大学や研究所、居住環境の産・学・住が有機的に結合した高度技術集積都市を建設する構想であり、鹿児島県では昭和59年に国分隼人テクノポリス開発計画が国の一次指定を受け、中核を担う工業団地として国分上野原テクノパークが整備、昭和63年から分譲されている。(166字)

(5. 解答例)

世界有数の活火山「桜島」は標高 1,117mで鹿児島島のシンボルとして多くの観光客が訪れている。北岳、中岳、南岳の三峰が連なり、海上火山景観の優れた山と言われている。また、標高 924mの開聞岳は、その美しさから薩摩富士とも呼ばれ、太平洋戦争では特攻隊員たちの「サヨナラの峰」にもなっていた。また、標高 1,936mで九州最高峰の宮之浦岳があり、海岸地域の亜熱帯性植物から山頂部の亜高山帯までの植物を観察することができる。

(207 字)